

# インクルーシブな教育を担う教員養成に向けて（1）

－ 学部講義における「特別支援教育の視点」の認識傾向 －

○青山 新吾

（ノートルダム清心女子大学人間生活学部）

KEY WORDS: インクルーシブ 教員養成 特別支援教育の視点

## （目的）

学校教育の現場において、インクルーシブ教育ということばを耳にすることが増えている。青山・井根(2016)は、現段階における小学校・中学校の教員のインクルーシブ教育に対する認識を報告した。そこでは特別支援学校教諭免許状の取得や、特別支援学校への勤務経験が、インクルーシブ教育という言葉への感度を高め、個別の教育支援を重視する傾向につながっていた。しかし、これは「可能な限り共に学ぶ」ことと結びつきにくくなる可能性も示唆していた。インクルーシブな教育を担っている教員に必要な素養は何なのだろうか。

本研究では、そのヒントを探るため、大学1年生を対象とした特別支援教育関連の基礎講義において、学部生が「特別支援教育の視点」をどのように認識したのかを整理すると共に、その認識がインクルーシブな教育を担う教員の素養としてどのように影響する可能性があるのかについて考察することを目的とする。

## （方法）

筆者の在籍する本学児童学科の1年生を対象とした「特別支援教育総論」の講義受講者が、講義終了後に自由記述で回答した内容を分析対象とした。本講義の受講者は137名(1年生135名、2年生2名)であり、学科に在籍する1年生の92%が受講した。受講者は小学校・特別支援学校コースと保育士・幼稚園コースの学生が両方であるが、受講時点では明確にコース分けをしていない状態である。初めて特別支援教育を学ぶ学部生を対象としているため、障害の捉え方、各障害種類についての概説、現場における特別支援教育の実践の紹介、保護者の特別講義等で構成している。学部生に依頼した自由記述の項目は以下の通りである。

表1 自由記述の項目

- 1 特別支援教育の視点とはどのようなことを指すと考えますか？
- 2 幼稚園や小学校において、特別支援の視点を取り入れた保育や教育を進める際に、貴方が取り組んでみたいことを2つの視点からそれぞれ具体的に述べてください。2つの視点は、この講義で学んだ内容から選んでください。

## （結果）

自由記述の内容を抽出して整理した。

表2 特別支援教育の視点（3つ以上列挙した際は上位2つ）

<b>A) 障害のある子、気になる子に焦点をあてたもの</b>	<b>73</b>
○言動に対してなぜ？ どうして？ を考える	33
○一人一人の障害や個性を理解する	20
○障害のある子一人一人に合う教育を行う	10
○その他（無理にさせない等多数）	10
<b>B) 全ての子どもたち、周囲の子どもたちに焦点をあてたもの</b>	<b>71</b>
○視覚化・共有化・焦点化	32
○環境の整備	18
○どの子も共に教育を受けられる	6
○温かい集団をつくる	4
○どの子も分かりやすい授業をする	3
○その他（授業にみんな参加する等多数）	8
<b>C) A, Bのいずれか判断できないもの</b>	<b>4</b>

表3 具体的に取り組んでみたい2つの視点

<b>A) 障害のある子、気になる子に焦点をあてたもの</b>	<b>38</b>
・個別の指導・支援	19
・子どもの考えを知ること	4
・子どもとの関係づくり	3
・見通しを示す	3
・対話する	2
・背景要因の理解	2
・その他（見守る、観察等多数）	5
<b>B) 全ての子どもたち、周囲の子どもたちに焦点をあてたもの</b>	<b>197</b>
・視覚化	79
・教室環境の整備	37
・学びのしかけ（授業の工夫のこと）	32
・焦点化	22
・周囲との関係をつくる	13
・共有化	10
・アクティブ・ラーニング	3
・クラスの子どもたちと一緒に考える	3
・その他（協同学習、交流及び協同学習等多数）	8
<b>C) A, B以外の視点</b>	<b>5</b>
・チーム対応、保護者との協働	5

表4 インクルーシブ発想（つながっていく発想）に該当する視点

該当する視点	34
・周囲との関係をつくる	13
・共有化	10
・クラスの子どもたちと一緒に考える	3
・その他（協同学習、交流及び協同学習等）	8

## （考察）

1 本講義では、特別支援という考え方、子どもの見方、「集団の中の個」としての捉え方、すなわち周囲との関係によって個を捉えることのバランスを重視している。それが、特別支援教育の視点として障害のある子どもへの視点と全ての子どもたち、周囲の子どもたちへの視点のバランスよく指摘されていることにつながった可能性がある。

2 実際に取り組んでみたいこととしては、圧倒的に全ての子どもたち、周囲の子どもたちに対する視点が多かった。これは、視覚化や教室環境の整備が学部の1年生にとっても分かりやすいこと、集団全体に対するアプローチは、これまでの自分自身が受けてきた一斉授業の経験と重ねてイメージしやすいことが影響していると考えられる。

3 子ども同士のつながりをインクルーシブ発想だとするならば、実際に取り組んでみたいこととしてあげられた197のうちそれに該当するものは34(17.3%)にすぎなかった。これは、学部生がこれまで自分自身が受けてきた教育の中に、つながる、多様な子どもと共に学ぶという視点が弱いことと関連している様に考えられる。

以上のことから、インクルーシブ教育を担う教員養成の基盤として、個への視点と「集団の中の個」の視点のバランスを取ることで、個別のアプローチや共に学ぶアプローチについて丁寧に扱い、共有していく必要性が示唆された。

(AOYAMA,Shingo)